御用学者を動員する会社
＝最近の〝くろだいや新聞〟から＝

三川支部 北村 瞳

会社の〝くろだいや新聞〟が、天野貞祐の「自由について」という文章を、いま連載しています。

天野貞祐については、ご存知の人もおおいと思うが、吉田内閣で文部大臣をつとめました。そしてそのとき「道徳教育」が必要であるということを持ちだしてきました。実は、天皇陛下のために喜んで死に、資本家のいうなりになる人間をつくるのがねらいでした。こんにち、勤務評定がだされているように、一連の反動教育攻策の口火をきつたものであり、彼のその罪と責任は消えるものではありません。

そういう人物が「自由について」を書いていること。さらに、それを「くろだいや新聞」がのせていること。この二つの意味を私たちは見ぬいて、ダマサレないようにしたいと思うのです。

なぜなら、天野貞祐は—自由が過ぎる日本・社会を不安にする—という見出しがずばりと示しているように、「自由について」彼はそれを資本家階級の利益のためにつくす立場から、書いていると判断できるからです。

十月十五日号の〝くろだいや新聞〟で、天野貞祐は、くり返し、ソ連や中国に自由はなく、日本は自由がすぎるから、ともに歓迎されないというい方をして、結局道徳教育が必要だというように、問題をデマや中傷でそらそうとしています。この真の目的は、職場闘争や労働運動などの自由も、やはり制限されるのが当然なんだという考えを、私たちに注ぎこもうとするものであり、さらに、私たちが賃金ドレイの状態から国の主人公として解き放されていく道をかくそうとするものです。

これが昔なら、文章やなんかでという、遠まわりなことでなく、棒でぶんなぐつて働かせればすむことでしたが、いまは時代がちがいます。じわじわと首をしめるやり方をとります。

その一つの証拠になると思いますが、この間は、巨人軍の水原監督の文章がのりました。

あれは、野球に勝つには九人が力をあわせて、チームワークをとり、その中でよく働き監督の指示にしたがつて反抗せず、個人プレーはしないことだということでした。野球の話としてはその通りです。水原監督もウソはいつていません。——しかし〝くろだいや新聞〟はその話をよませておいて、一方で、生産も同様だ、職制の命令にしたがつて文句をいわずに働けば、会社は生産競争にかち、したがつて諸君の賃金もあがるだろう（労資協調）と暗示し宣伝をするやり口です。

「自由について」という文章もこまかく分せきすれば、悪意と中傷にみちており、それを学者らしく、決断の自由、社会的自由、実せん的自由、法律上の自由、社会的な自由などものものしく分るいします。こうしたやり口こそ、観念論哲学＝形而上学などといつて、その派の哲学者のおとくいとするところです。天野貞祐はカント哲学者として、観念論哲学に属しています。

たとえば、ソ連や中国について法律的自由が少ないから為政者はどういうことでもやれる。どんな大工事をやろうが、不自由していようが重点的にやれるということを書いています。ところが、それらの国について、宮川組合長や酒井県議が直接みてきているのでは労働者のくらしは安定しています むろん失業者は見当らず、みんな建設欲にもえているということでした。

日本はどうでしょう。失業者はあふれていても、失対の予算はけずり、アメリカの中古品による再軍備にボー大な税金を集中しています。これでもうけるのは米日資本家どもです。それでも足りず警職法を持ちだして私たちの生活と権利を守る自由すらも奪いとろとしています。

むろん中国やソ連には、エロ、グロ映画をつくつて暴利をむさぼつていいという自由はないし、その点では、資本家にとつて、まつたく腹のたつほど不自由な国でしよう。

しかし、労働者は資本家のそんな不自由さを、同情して考えてやる必要はないのです。要するに、天野貞祐は、自由といい、不自由といい、誰にとつてなのかということを無視してかかるのです。こうした片ちんばなものの見方と、労働者階級がみずから国の政治をとつている国々への、悪意にみちた中傷をふりまいている学者を御用学者というのです。

〝くろだいや新聞〟はそれをのせることで、三池の労働者を感想的にねむりこませ、このさき、長計勤定闘争や、期末手当や賃闘など、いろいろのたたかいが、「自由の行きすぎではないのか？」と組合員を動揺させるための布石をおいているのです。これは資本家からのきわだつた思想攻撃として「みいけ」で反撃していく必要があると考えます。

〝麦や菜種はイナ 二年でナア
刈るがイナ
麻刈らりようカイナ
半土用にナア

〝波の屋島を のがれきて
薪こるちよう 深山辺に

〝烏帽子 狩衣（カリギヌ）
脱ぎうちすてて
今は越路の そま屋かな

〝心淋しや 落ちゆく道は
川の鳴瀬と 鹿の声

越中の山々にこだます「麦屋節」

富山県周辺には、生糸、和紙の八尾町を中心にうたいおどられる盆踊唄「越中おわら節」と、その南部いつたいで古くから、うたいつたえられる生活のうた「麦屋節」の二つの民謡があります。

ご紹介する「麦屋節」という名称は、〝麦や菜種は……の歌詞からでたものです。

一一八五年（文治元年）壇の浦の源平合戦に敗れた平家の一族郎党は九州の日向（椎葉）に……稗搗節参照のこと（九月七日発行「みいけ」五四一号）……または越中五箇山（美濃、飛ダの国境、烏帽子岳を水源地として富山湾に注ぐ庄川上流にある五ツの谷）の山深い僻地へ、安住の地をもとめ隠れ住むため逃げてんだのです。

五箇山というところは、まさに川の瀬音と鹿の鳴き声のみをきく幽境といわれ、源氏の追手をのがれたかれらは、ありし日の栄華の夢をしのびながら落人の憂を、身を唄によせて嘆いたのでした。

生活へのたのみを麻、菜種の栽培にもとめて寄住し、生活のうたにはげまされながら、山間部のわびしさをまぎらわしたといわれているのです。

現在、この辺ぴな山峡にもダムがふえて、大家族の住んでいた切妻合掌づくりの家々もかずすくなくなつているようであります。

メロデイー・リズムとも当時の実感がよくでており、優美で、しかも哀調を帯びていることはいうまでもありません。

この唄は郷土芸能にふさわしく、いまでも古式ゆたかに

（服装）紋付、袴たすきがけ、尺八寸の太刀のいでたちに

（鳴物）太鼓、胡弓、笛、三味、四ツ竹、尺八など和風一色のオハヤシを和し、うたいおどられる風景がみうけられているようです。同郷の越中おわら節は二百十日の厄日の無事をねがい、稔りの秋をことほぐいみで毎年九月一日の夜から三日三晩、八尾の町あげて踊り抜かれ「風の盆」の異名ある賑やかな盆踊りでありますが、これにくらべると「麦や節」ははげしい戦火の傷心をいやす落人たちの悲壮な訴え、叫びの一つ一つに哀愁をふくみ、しかも苦しい生活に耐え抜いたたくましい闘魂が、本当に眼前にありありと浮んでくるようです。

私たちも生活をまもるために、日常数多い闘いが職場、地域のなかで繰りひろげられているのです。「うた」は私たちの生活に切り離せない密接な関係があります。力づよいうた、明るいうた——誰にでも気軽にうたつてもらえる安易な「生活の歌」を創りだし、ますます「うたごえ」の発展を祈りたいものです。（やました）

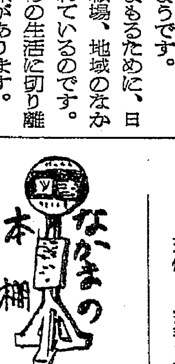
新年文芸

例年おこなつております〝新年文芸〟をことしも募集しますが、こん回は締切日を少しはやくしたいと思つていますので、創作など脱稿までに時日がかかる作品は、いまから準備していて下さい。

炭労各支部ともさいきんの文芸活動は、いよいよ活発になつてきました。新年文芸を質量ともにこの際高めるよう、奮つて応募されるよう期待しています。

なお、各種目ごとの詳細な規定は追つて本紙に掲載いたします。

編集部



正しいものの見方をしめす「知と愛の流れ」

私たちは、どこかで心のあたたまる場所をもとめながら、日々の生活に追われあわただしく毎日をすごしてしまいがちです。うつかりすると人間らしい生活さえも忘れてしまいそうです。

そんな私たちに、現在をより明るく豊なものに前進させるためには、目の前にあるものや私たちの周囲にあるすべてのものを、正しく見つめ考えることが必要なことをこの書はおしえています。

著者は、私たちのまわりにも、いつもころがつていそうな問題をとりあげ、そこから教訓をひきだしてくれています。

幸せになりたい、もつといい生活をしたいとかんがえない人はないでしよう。それでも人間の世界である私たちの世の中では、すべてのものが私たちの幸せのために動いているでしようか。いまの世の中のしくみでは、私達の幸せが一番なおざりにされているような気がしてなりません。

このことを一人で悩んでも解決の道は見出されないでしよう。多くの仲間とつどい、同じ悩みを語りあえば、たとえその解決の糸口は見出せなくとも、その悩みが自分一人だけのものでなかつたことを知り、仲間意識がうまれ、生きていく大きなはげましになるはずです。また、そうしてみんなが力をあわせることが、現代の共通の悩みの解決の方向に、一歩でも近づくことになると思います。

著者もいつているように、みんなが力をあわせるということは組織によりかかるのではなくて、自分をみつめむきだしの人間と人間がふれあい、本当のことはいわねばならない〈ひとりよがりの住んでいるところは、一番団結のよわいところだからである〉と思います。

この著書をよんだあと、自分の中に明るい希望の芽がのびたことに気づき、私たちが今どこへ進まなければならないのかの示唆をあたえられました。

人間として、何が大切であるかを、決して派手な言葉ではなく、生活に根をおろした深いところで考えさせられました。

すべてのものごとを考える土台をしめし、私たちが進んでいく出発点となる本だと思います。（ま）

丸岡 秀子 著
理論社（二四〇円）

製煉と合同歌会
三作の短歌サークル

三作短歌サークルでは十月二十九日、初の三煉短歌会との合同歌会を午後五時から亀甲クラブで二十五名の参加で催した。同歌会には岩本宗二郎氏を招き、選評など指導してもらつたほか、互選会をおこなつた。当日の作品つぎの通り

三作 藤本 盛登
熔鉄を鋳型にそそぎ保護眼鏡はずせば屋根が痛く光れり

製煉 光田
しづかなる寝息をきけばうれしかりひたむきに耐えて病む夫なれば

三作 井手口富子
身につきし消毒のにおえる夕べの街に君近づきて云ふ

製煉 中島 正勇
癒え難き身は瑕えゆかむ一刻を外科医の執刀に写る花影

三作 永松 運造
妻子らと呑み続け来しビタミン剤の残り少きを振すかしみる

映画
清純な音楽映画 野ばら

一九五六年のハンガリア動乱の際オーストリアに逃れてきた避難民の孤児を主人公とし、世界に名高いウイーン少年合唱団の生活を、美しいオーストリアの風景を背景に描いた清純な音楽映画である。ウイーン少年合唱団は、映画にもたびたび声だけの出演をしているが、実際に画面にあらわれて演技を見せるのは戦争直後のグスタフ・ウチツキイ作品「歌う天使」（未輸入）についで二度目で、わが国にはもちろんはじめての登場である。また、合唱団の本拠となつているウイーンのアウガルテンの宮殿や東チロルの山荘なども、実際にロケを行つて撮影したもので合唱団の生活が、現実そのままの姿で描かれている点、貴重な記録ともいえる作品である。

監督に当つたのは、オーストリアで戦前から活躍、手堅い作風をみせていたマックス・ノイフエルト。わが国で彼の作品が公開されるのは三四年の「青い木の実」以来、二本目である。脚本は、そのマックス・ノイフエルトと、カール・ライターが協力して書き下したもの。

撮影は、戦前デユヴイヴイエの「巨人ゴーレム」やトウルヤンスキイの「ほえろヴオルガ」などで美しい画調をみせたチエコ映画界の名手ヴアクラフ・ヴイツヒが担当

アグフアカラーによつて、オーストリアの美しい風景をおさめている。

また、ウイーン少年合唱団を中心としたものだけに、劇中、われわれの耳に親しいシユーベルトやモツアルトの数かずの名曲や、美しいウイーンの調の歌が数多くおりこまれているが、音楽を担当しているのは新鋭のハインツ・ノイブラント。とくにこの映画のため「陽の輝く日」「歌声ひびけば」の二曲を新しく作曲している。作詞はフエリツクス・ホルスト

出演俳優の中、主役を演ずる子役ミハエル・アンデは、さいきんの「菩提樹」にも出演しているが、デユヴイヴイエ監督のフランス映画「わが青春のマリアンヌ」撮影の際、見出された少年で、同映画以来八本の映画に出演している名子役である。（十二日よりセントラルで）

老人も招待
港務臼井の運動会

港務支部臼井分会では、秋季運動会を二日午前九時から臼井グラウンドでもよおした。

秋晴れの好天気にはめぐまれたが前日の雨に運動会ができるかと地域の人たちの心をもませる一幕もあつたが、無事にひらかれ主婦も子供も参加、楽しいレクレーションの一日を飾つた。

とくに本部天幕の横には、もう一張りの天幕を張り、地域の老人たちを招待して、お年寄りも参加はできなくとも楽しく一日見てもらおうとの気の配り様で、菓子折をもらい胸にはリボンをつけてこの日は老人たちも大喜び、楽しい一日となつた。

運動会は紅白に分かれての綱引きからはじまり、魚釣り、君の名は四十五才の抵抗、三百才リレーと新企画のプログラムが編成され、青空の下にのびのびと走りまわつた。

また、なかには主婦たちの仮装よろしく応援団も繰出し、グラウンドに拍手と爆笑を湧かした。